
鏡の中の私2 「俺と天使？」 続編

榛名屋 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の中の私2 「俺と天使？」 続編

【Nコード】

N8908R

【作者名】

榛名屋 忍

【あらすじ】

不安な思いで迎えた入学式。福井希美は文学部にスカウトされ、図書室に招かれる。

私は保健室を出ると廊下で母と合流して入学式に出た。けれども教室に行く勇氣はなく、保護者会に出る母の目を盗んで早退することにした。

「福井さん、だよな？」

帰ろうとしたところ、私は玄関で呼び止められた。そこに立っていたのは二人の男子生徒だ。

「突然ごめんね。僕は菅原悠里。文学部の副部長です」

声の主は小柄で優しいような男子。その隣に立つ背の高い男子は少し目つきが悪く、私は圧倒されてしまった。

「俺は生徒会長の渡会夏樹です。文学部の部長もしています」

生徒会長。たしかに先ほどの入学式で見た顔だ。遠くからだったのでこんなに目付きが悪いなんて気がつかなかったのだ。

「文学部の見学に来てくれないかと思って、福井さんのこと探してたんだよ」

菅原先輩が穏やかな声で呼びかけてくれたので、悪い気はしなかった。私は見学する意思を示すため、二度ほど頷いた。

「悠里は教室に戻っていいよ。俺が図書室に案内するから」

私が頷いたのを見て、渡会先輩は言った。菅原先輩が渡会先輩を見る。

「いいんですか？」

「三年生はクラス替え無いから、ホームルーム一回くらいどうってことないよ」

「そうですか、じゃあお願いします」

無言のままついていっても、渡会先輩は気にしなかった。図書室に入ると、渡会先輩はこちらを向いた。

「安心して。声のことはわかってる」

私は驚いて口を開けた。

「ごめん、気になって調べたんだ。俺たち、あらかじめスカウトする生徒は福井さんって決めてたから」

スカウト。つまり、単に目についたから声をかけたというわけではないらしい。しかし、文学部とは一体何をする部活なのか。そもそも私は部活に所属していいのだろうか。

「不安だと思う、きっと。これからうまくやっていけるか、気になつてと思う。だから帰ろうとしてたんでしょ」

目付きは悪いが渡会先輩は優しい声で話しかけてくれる。私は合わせて頷いた。

「心配いらないよ。少なくともこの部活に関してはね。俺も、さっき君に話しかけた悠里も、文学部のおかげで楽しく学校に通えるようになったから」

ガラッと音を立てて扉が開いた。合わせて男子生徒の声がした。

「おいっ渡会！ 会長のくせにホームルームサボるな！！」

私はその男子生徒と目が合った。それは先ほど保健室で別れた森村先輩だった。

「ああっ」

森村先輩は大声を上げると扉の陰に隠れた。

「悪い。俺、帰るわ」

「何言ってるんだよ森村。おまえも部員なら定例会に参加しろ」

「いや、これには理由が……」

嫌がる森村先輩を渡会先輩が引きずりだして椅子に座らせた。私の目の前に座った森村先輩はぼつが悪そうだ。

「ごめん。俺はそんなに部活に出ないから、君は入りたい部活に入ればいい」

森村先輩は申し訳なさそうに言う。私はおそらく嫌悪するような表情を浮かべていたのだろう。

「なんだ？ もしかして顔見知りだったの？」

「いや、俺が悪いんだよ、渡会。俺が彼女に酷いことをしてしまったから」

森村先輩は必死に訴えている。別に私もこれ以上責めるつもりはない。私は渡会先輩を見つめた。

「彼女の話、聞いてあげたら？」

渡会先輩は私の表情を読み取ってくれた。すかさず私はメモ帳に文字を書いて森村先輩に差し出した。

「もう謝らなくてもいいです」

「そ、そうなのか……。ならいいんだが」

「それじゃあ、俺からも聞くけど、この部活に入部してくれるかな？」

「わかりました」

私は断る理由がないと判断した。どうも悪いひとたちとは思えないからだ。

「よかった。そろそろ他の部員も来ると思うけれど」

次に扉を開けたのは真新しい制服をきた女子生徒。私と同じ一年生だ。

「小春！ 大丈夫だったか？」

彼女が入るなり渡会先輩のテンションが上り、表情も柔らかくなる。名札を見ると、彼女も苗字は渡会。つまり妹だ。

「お兄ちゃん、そんなに心配しなくても大丈夫よ。私はすっかり元気なんだから」

「こんにちは、小春ちゃん。入学おめでとう」

森村先輩もよく知っているらしい。笑顔で話しかけている。

「慎吾ちゃんもありがとう。私も文学部に入るから、よろしく願いします」

私は三人の様子を静かに見ていた。初めにこちらに気がついたのは渡会小春だった。

「あ、もしかして福井さん？ 教室にはいなかったけど、体育館に

はいたよね？」

私は頷いた。彼女は私の同級生らしい。

「私は渡会小春です。同じA組だよっ」

彼女が握手を求めてきたので、私は手を差し出した。彼女からは全く悪意を感じない。これまでに見てきた同級生たちとはまるで違う。

「小春は最近まで病院に入院していたから、こうやって学校に通うのは初めてなんだ。よかったら、いろいろ教えてあげて欲しい」

渡会先輩が頭をさげる。私はメモ帳にメールアドレスを記すと、彼女に手渡した。

「ええと、これは？」

困惑する彼女に渡会先輩が寄り添った。

「メールしていいってことだよね？」

私は頷いて応えた。

「わぁ。嬉しい。ありがとう、希美ちゃん」

彼女は私のことを「希美ちゃん」と呼んだ。私も呼んであげたかったけれど、声にはならない。あとでメールをするときに、そう書いたらいいかもしれない。

「悠里と槇さんも来たね。あ、来栖も。じゃあ、部活を始めようか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8908r/>

鏡の中の私2 「俺と天使？」 続編

2011年3月24日15時55分発行